

「バトンを渡す、まちなかの一週間」

珠洲市おためし滞在拠点デザインコンテスト2025

名前：EMI OISO

エリア：まちなか

登録番号：240015

～自己紹介～

＼ ハジメマシテ ／

名前：EMI OISO

▶大磯 恵美 オオイソ エミ（8割の確率で磯と間違われて磯ポリスが出動するのでEMI OISOと表記している。）

出身：神奈川県横浜市

▶”トカイまち”で生まれ育った浜っこで32年間過ごした。

1992年生まれで現在34歳。iOSエンジニアになりたくて8年務めた良品計画を退社。アプリはApple Storeにて公開中。

なぜEMI OISOは珠洲にいる？？？

▶2023年に多拠点生活を開始し、二拠点目として珠洲と出会い、滞在の途中で銭湯に関わり始め、2024年から一年間、珠洲で暮らしました。

そのなかで、**珠洲市は「EMI OISO」として生きていけるまちだ**と確信し、このまちに bet することを決めました。
2025年の元旦、自らの意志で珠洲を選び、移住しました。🎊

▶2024年の元旦に珠洲で大きな揺れを体験し、現在は好きだったが、行けなくなった場所がある

▶自分のケアのためにも珠洲に関わり続け、現在は銭湯の運営と百姓を主に活動している

なぜこのプロジェクトを考えたか

＼ *歴史が君を必要としたからだ ／

① 気づき（番台での観測）

▶私と同じように、近づけない場所がある人がいることを、銭湯の番台に立っていて知った。私は2023年12月以降の珠洲しか良く知りません。だから、自分の想像を越える珠洲に対して、表現しがたい感情を持っている人がいるのだと知りました。

② 違和感の共有（まだ言語化されていない感覚と現状）

▶番台に立っていると、地元の方、ボランティアさん、解体業者さん、それぞれから変化していく珠洲に対する違和感を聞きました。「進んでいるけど、なんか変な感じがする」それは、まだ言葉になっていないフェーズの感覚だと感じました。しかし、今の珠洲は、誰か一人ではなく、**歴史（珠洲）**が必要とした人たちが関わった、一人ひとりの行動の結果でできていると思っています。

③ 具体的な光景とそこから生まれた考え

▶解体業者さんと地元のばーちゃんが、仲良く一緒に銭湯に来てくれたり、ばーちゃんが風呂の回数券を買って、それを解体業者さんに渡しているのを見て、「関わり続ける入口」が必要だと思った。

④ 提案の意図

▶私は、珠洲に長くいる方々よりも、良い意味で珠洲をよく知らない立場にいます。だからこそ、変化していく珠洲を、比較的フラットに、ポジティブに観測できる存在だと思っています。歴史が必要とした人たちと一緒に、珠洲というまちをつくっていきたい。この提案は、その「関わり続けるきっかけ」を生み出したい、という思いから生まれています。

「珠洲市おためし滞在拠点デザインコンテスト2025」でやりたいこと！！1/2

＼ 私は、滞在拠点を「滞在するための箱」ではなく、**銭湯を起点に、地域との関係に入っていくための入口**としてつくりたい！ ／

滞在拠点は「泊まる箱」ではなく、関係に入るための入口

- ▶ 銭湯を起点に、地域の日常に自然に入り込める拠点をつくりたい
- ▶ 私自身が、住民でも関係者でもない立場で銭湯に関わり始めた経験が原点

「踏み込んでいいのか分からない」不安を、制度で越える

- ▶ 都市から来た人が関わりたくても、社会構造上その一歩を試しにくい現状がある
- ▶ 珠洲市という公式な立場が後押しすることで、「凸していい」状態をつくる

銭湯という日常の場から、自分なりの関わり方を見つけていく

- ▶ 個人の勇気任せではなく、「少し関わってみること」が許されている場所
- ▶ 滞在者が地域の内側に入り、自分の役割を見つける入口にしたい

「珠洲市おためし滞在拠点デザインコンテスト2025」でやりたいこと！！！！2/2

＼ 「返す⇒渡す」のバトンの仕組みを作りたい！ ／

受け取ること・渡すことについての観測(自分と同じような人が増えたらいいな、理想像よりな意見、提案です。)

▶ 珠洲では、ものや時間が一方通行ではなく、自然に手渡されていくと感じている。

▶ 野菜やみかん、釣りや時間など、多くのものを受け取る経験をした
当初は「きれいに返さなければ」と考えていたが、そこに違和感を覚えた。すべてを同じ対価で返すことはできないとも感じた。

▶ お米でお返しした際、喜ばれつつも違和感が残った
それは対価ではなく、「ただ渡したかった」行為だったのではないかと考えている（この点はまだ仮説である）

▶ 受け取ったものは、同じ形で返さなくても、形を変えて次の人へ渡せばいいと考えるようになった。

▶ 人生で初めて作った、珠洲市若山町産のコシヒカリ約120kg分を、関東の友人たちに味見してもらった。
それは「返す」よりも、「食べてほしい」、「この体験を共有したい」という感覚に近いものでした。

▶ 一方で、お米を贈った友人たちに田んぼの手伝いをしてほしいという思惑もあり、まだ完全に「珠洲の人」になれていないと感じている。

▶ それでも、珠洲市民2年目としては、まずまずの立ち位置にいると考えている。継続して関わり続けることで、少しずつバトンを渡す側にもなれていると感じています。

▶ 私が珠洲で銭湯、百姓、iOS 開発、自動車整備士としてやわやわ活動できるのは運が良すぎたとも思っている。誰でも関われる構造をつくりたいと考えているので、一緒に考えてほしい。

バトンが通過する拠点

＼ 私が仲間たちと運営している銭湯、海浜あみだ湯♨️では、既にバトンが通過している拠点です。 ／

チョッコシ、海浜あみだ湯♨️の紹介

▶まちなか・野々江町にある銭湯、海浜あみだ湯は、2025年12月に事業承継を行い、石川県初となる労働者協同組合、「海浜あみだ湯労働者協同会」として新たにスタートしました。ここでもまた、ひとつのバトンが受け継がれています。私が仲間たちと運営しているこの銭湯は、「これから始まる場所」ではなく、すでに人と人との関係や思いが通過してきた拠点です。そしてボイラー室には、震災をきっかけに解体された家屋の一部が、薪として積まれています。火で湯を沸かしながら、今の珠洲を身体で知る。失われたものが、あたたかさへと姿を変え、

そ
その

今日も誰かの「ただいま」と「おかえり」を温めています。

この一週間の滞在は、ゴールではありません、、、！

▶「まちなか」を起点に、里山、里海 | 外浦、里海 | 内浦を訪れ、比較しながら、自分が珠洲でどこに一番“自分らしく存在できるか”を身体感覚で確かめてほしいと考えています。(訪れてみて、やっぱり違ったでもいいと思っています。)

▶私は約30年のトカイインスパイアが色濃く残っているので、もう少し「まちなか」を堪能したいと思っていますが、他の拠点に滞在した方には、ぜひその感想をシェアしてほしいです。

私たちは、バトンを渡す準備がすでにできています。

▶トカイの言葉に翻訳すると銭湯に来るばーちゃんからは「饅頭屋さんを復活させたい」という話を聞き、じーちゃんからは「気軽に行ける男の釣り仲間がほしい」という声もあります。正直なところ、常連さんたちのそれらは私ひとりでは抱えきれません。一緒にやってほしい伴走者、背中を押してほしい人を、探しています。だからこそ、まちなかを起点に、珠洲でしたいこと、できることを、一緒に増やしていきたいと考えています。移住相談については、8年前に移住した先輩もいます。気軽に声をかけてほしいです。



この提案の中で、私が何度も使っている「バトンを渡す」という言葉は、最近読んでいる漫画『チ。』の影響を強く受けています。

作中にある「**歴史が君を必要としたからだ**」というセリフに出会い、それは今、珠洲で起きていることそのものだと感じました。

自衛隊、ボランティア、解体業者、地元の人。

立場も背景も異なる人たちが、それぞれの役割を果たした結果として、今の珠洲は形づくられています。

そしてこの『チ。』という漫画自体も、海浜あみだ湯を遠隔で支えてくれている方から寄付された一冊です。

誰かの思いが、物として手渡され、時間を越えて、今の私に届いています。

実際に、6集にはワインの広告の札がしおりとして挟まれており、前の所有者の気配を感じました。

この巻は物語の転換期で、やや間延びする場面でもあるため、「このページで一度離れたのだろうか」と想像しました。

一方で、2集以降はすべて初版本であったことから、前の読者はこの物語を最後まで読み切ったのだらうとも感じています。

この拠点から、「歴史が君を必要としたからだ」と言われる人が、また一人、増えていく。

そんなバトンの**通過点**を、まちなかの銭湯を起点につくりたいと考えています。

珠洲市おためし滞在拠点デザインコンテスト、審査員の皆さま／事務局の皆さま

この度は、プレゼンテーション提出方法につきまして、柔軟にご配慮いただき、誠にありがとうございます。

現在入院中のため、動画での提出が難しい状況ではありますが、ご相談のうえ、スライド資料のみでの提出をお認めいただいたこと、心より感謝申し上げます。

音声収録自体は可能でしたが、施設の環境上、安定した収録が難しいと判断し、今回はスライドのみでの提出といたしました。

本来であれば、言葉で直接お伝えしたかった想いもありますが、その分、スライド一枚一枚に、作品に込めた意図や背景、これまで珠洲で観測してきたことを丁寧に込めています。

お忙しい中で、スライドを読み進めていただくこと自体が、私にとってはとてもありがたいことであり、深く感謝しております。

また、私は建築の専門家ではなく、この提案も「現場での実感」や「関係のあり方」から立ち上げたものです。そのため、実際に建築・制度・運営へ落とし込む際に、どこが課題になるのか、どの視点を補うことで実現可能性が高まるのかについて、それぞれの専門分野からのご意見やフィードバックをいただけましたら、大変ありがたく思います。

審査結果に関わらず、この提案が「どうすれば現実に根づくのか」、また「どのようにバトンをつなぎ続けられるのか」について、審査員の皆さま、実行委員の皆さまとともに考えていけたら幸いです。

提出形式に関わらず審査いただけるとお言葉にも、大変心強く感じております。ご配慮をいただいた分、この提案が珠洲の未来にどのようにつながり得るのか、少しでも伝わることを願っております。

このような機会を設けていただき、誠にありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

大磯 恵美